

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
(グローバル展開プログラム)

研究成果報告書

「アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究」

研究代表者： 水島 司

(国立大学法人東京大学大学院人文社会系研究科 教授)

研究期間： 平成 25 年度～28 年度

1. 研究基本情報

課題名	グローバル人文学
研究テーマ名	アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究
責任機関名	国立大学法人 東京大学
研究代表者(氏名・所属部署・役職)	水島 司
研究期間	平成25年度 ~ 平成28年度
委託費	平成25年度 8,144,000円
	平成26年度 20,000,000円
	平成27年度 17,800,000円
	平成28年度 12,250,000円

2. 研究の目的

欧米を中心に、近年極めて精力的に展開されてきているグローバル・ヒストリー研究は、大きな歪みをもつ。欧米と非欧米世界の間での史料の蓄積の圧倒的な差、近代が欧米により先導されたという歴史的事実、欧米が主導するアカデミズムへのアジアの国々の歴史研究者の無原則の受け入れもしくは後ろ向きの姿勢、脱植民地化過程で国民国家形成の核として歴史学を位置づけなければならなかった新興国家の歴史学の責務等々を背景として、グローバル・ヒストリーは、近代という、欧米が主導した時代での欧米の先導性を照射することを主眼としてきた。他方、アジアの近代の主体的な発展とその独自の意義については、大半のアジア研究者の無関心のゆえに、あるいはアジア地域全体としての歴史発展の共通性とその中での独自性、固有の意義を共同して見出そうという意識の薄さのゆえに、積極的な評価の試みは例外的にしかなされなかった。その結果、近代のアジアは、欧米の宗主国によりそれぞれ統治される従属空間であるか、直接支配下になくとも、近代欧米世界に寄り添う脇役としてしか世界的には認識されないままにきた。

このような研究状況に対して、「グローバル・ヒストリー」を標榜し、その見直しを図る日本の研究者は、孤軍奮闘とも呼べるような試みを重ねてきた。海域史を中心に、アジアがグローバル・エコノミーの形成に果たして来た積極的な役割を提示しようという近年の流れも、その一環である。本研究は、こうした海域史研究が、いわば線的なつながりを解明しようとしてきたことに対し、「開発」を前面に出し、アジア各地の対応とその空間的な変化を扱おうと試みた。具体的には、小農による耕地開発、人の移動と都市の成長、グローバル・エコノミーに対応した経済活動の諸側面を分析対象とし、面的な発展における個性と共通性を、面的変化の解明に最も有効な地理情報システム(GIS)を共通の手法とし、この課題に取り組んだ。

このような取り組みに関して、まず基盤となるのは「アジア歴史空間情報システム」の確立である。本研究は、「グローバル人文学」を具現化する試みである。「グローバル人文学」として研究代表者が理解するのは、第一に、取り組み自体が内外の研究者を糾合するものであること、第二に、その成果がグローバルな発信力をもつものであることである。第一の点に関し、本研究では、研究代表者および分担者が研究交流を企てたエジプト、インド、タイ、インドネシア、フィリピン、中国、台湾などのアジア諸国の研究者を加え、国際学会、国際会議、セミナー、講演などを通じて緊密な連携を打ち立てた。これらのアジア各地の研究協力者たちは、それぞれの国において、地理情報システム(GIS)や史料データベースの構築に関して主導的な立場にある研究者、あるいはGIS導入に積極的な関心をもつ若手の研究者であった。第二の点に関しては、研究代表者が設立以来事務局長として主導的に関わってきた国際ネットワークである Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS)を媒介にして、その着実な進展を図った。ANGISの運営に関しても、会長はアジアの中で最も歴史GISに関して先端的な研究を推進している台湾中央研究院(Academia Sinica)教授のI-Chun Fan氏に交代し、今後の国際会議も中国、インドで開催されるなど、アジア全体の組織として自律的に動きつつある。GISを利用したグローバル・ヒストリー研究とその国際的な研究者ネットワークの拡大・深化は、本プログラムをバネとして、着実に進んできた証左であろう。

以上のような体制の下での本プログラムの研究成果は、後に記す国際学会、国際会議、論文、著書を通じて発

信することとした。その中で成果発信のひとつの核が、上記 ANGIS から発行されている E-Journal の JANGIS (<http://www.lu-tokyo.ac.jp/~angisj/JANGIS3/JANGIS3.html> 他)である。GIS 研究の成果はカラー印刷が必須であり、通常の紙媒体のメディアでは発表が困難である。PDF で掲載しうる E-Journal が、より自由度の大きい発信媒体となる。JANGIS は、初期には本プログラムに参加している日本側の研究者が主導的に関わったが、現在は台湾中央研究院(Academia Sinica)の ANGIS 事務局が編集を担当し、国際的な Editorial Board による査読雑誌として発行されている。

以上のように、本プログラムは、国内外の研究者コミュニティにインパクトを与え、「グローバル展開プログラム」の目的に沿った成果を確実に得ようとしたものであった。

3. 研究の概要

本研究では、18世紀から20世紀におけるアジアの「開発」をキーワードにグローバル・ヒストリー研究を進めた。対象とした地域は、西アジアから南アジア、東南アジア、中央アジア、東アジアに至るアジア各地域であり、19世紀に入ってアジア全域で進むデルタを中心とした土地開発と人口増大、それらの開発を国内市場から世界市場へと結びつける鉄道を主体とする交通インフラ、開発原病でもある疫病の線的・面的広がりとそれに対する都市および保健衛生インフラ、開発地とそれらの市場を結びつけるために成長してくる都市のレイアウトとそこで活動する企業群の機能と発展、農業に並んで大きな意味を有した鉱山開発と生産・流通体制などの研究がその具体的な内容である。そして、その分析結果を、分析対象とする史料に空間情報を与えることによって歴史空間情報システムに組み換え、視覚化することを目指した。

このような試みを続ける中で、二つの柱を立てて、それを軸にして国際的な協働研究に進むこととした。第一は、アジア地域間の生産・流通・消費連鎖の研究である。研究協力者として中国海関統計に造詣の深い濱下武志、I-Chun Fan両氏を招き、内外の研究者20名を集めて、アジアの主要製品の生産地から最終消費地にわたる流れと価格の連鎖、それとともに進む農業開発、都市の発展などをGISベースにして研究するものである。対象とした地域は、エジプト、インド、タイ、ベトナム、インドネシア、中国、朝鮮である。この研究をアジアの研究者の間に発信することで、これまで参加していない若手のアジア研究者を組み込むこととし、より大きな柱へと成長させることを図った。第二は、アジアの都市形成の比較研究である。カイロ、ムンバイ、マドラス、カルカッタ、ジャムシエドプール、バンコク、バタヴィア、ハノイなどのアジアの都市形成を、GISを用いて比較研究するものである。このテーマは、多くのアジア研究者を巻き込みうるテーマでもある。実際、2016年12月にマニラで開催されたANGIS国際会議では、これら二つのセッションを中心に立て、研究成果を発信した。

このような協働研究の柱に加えて、個々の研究参加者においても、水島はインド人研究者と、加藤博はエジプト人研究者と、脇村孝平はインド人研究者と、川島真は中国人研究者と、それぞれ協働研究を進めてきた。もちろん、国内においても、歴史GISの手法を普及するための講習会を重ね、GIS処理しうるデータを収集してデジタル化を進め、GISで活用するための空間情報を加えてきた。

本研究は、このような活動を通じて、アジア全体を歴史空間情報システムという実証的ならざるを得ない手法を基盤としてクロスさせ、可能な限りアジアの研究者を引き込んでグローバル・ヒストリー研究で劣位にあった情報の集積と統合を図るものである。そのような研究を内外に発信することで、アジア研究者を少しずつではあるが組み込むことができた。

4. 研究プロジェクトの体制

研究代表者等の別	氏名	所属機関・部局・職名	研究項目
研究代表者	水島 司	東京大学・大学院人文社会系研究科・教授	データベース構築のカウンセリング、農業開発・都市形成に関するデータ収集と分析(南アジア)、国内外研究会の設定
分担者	島田 竜登	東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授	農業開発に関するデータ収集、入力、分析(東南アジア)、国際会議・学会等のセッション申請
分担者	川島 真	東京大学・大学院総合文化研究科・	鉱業に関するデータ収集、入力、

分担者	飯島 渉	准教授 青山学院大学・文学部・教授	分析(東アジア) 疫病に関するデータ収集、入力、 分析(東アジア)
分担者	上田 信	立教大学・文学部・教授	人の移動に関するデータ収集、入 力、分析(東アジア)
分担者	柿崎 一郎	横浜市立大学・国際総合科学部・准 教授	交通に関するデータ収集、入力、 分析(東南アジア)
分担者	加藤 博	一橋大学・名誉教授	農業開発・都市形成に関するデー タ収集、入力、分析(西アジア)
分担者	佐藤 隆広	神戸大学・経済経営研究所・教授	経済パフォーマンスの地域別比較 研究(アジア全域)
分担者	宮田 敏之	東京外国語大学・大学院総合国際 学研究院・教授	企業に関するデータ収集、入力、 分析(東南アジア)
分担者	脇村 孝平	大阪市立大学・大学院経済学研究 科・教授	疫病・保健衛生に関するデータ収 集、入力、分析(南アジア)
分担者	関野 樹	総合地球環境学研究所・研究高度 化支援センター・准教授	アジア歴史空間情報システムの開 発と応用

5. 研究成果及びそれがもたらす波及効果

①研究成果

研究計画書では、1. 本共同研究の成果は基本的に英語で公表する、2. 国際学会大会で独自のセッションを設けて多数の研究者が集まる場で集中的に研究成果とその意義を提起する場をつくる、3. 電子ジャーナルを活用する、という三つの点を挙げた。

これらの点に関して、研究代表者(水島司)の研究活動と成果から記す。水島は、第一に、歴史地理情報システムを活用したグローバル・ヒストリー研究の成果の発信を行った。南インドを対象に18世紀以来の人口と耕地開発に関する大量の村落史料の分析を進め、農村部での開発過程を長期分析した。その一方で、アジアの代表的な植民地都市であるマドラスをとりあげ、金融機関、株式会社、対外・内陸貿易、都市インフラ、都市住民の構成と生活環境に関する史資料をデジタル処理し、GIS処理のための基礎を整えた。そして、それらのデータをGISによって総合したマドラスの事例研究を、近代アジアの植民地都市形成の研究モデルとして提示し、他のアジア諸国の植民地都市との比較研究を推進した。こうした研究成果は、下記の国際学会・国際会議での報告、研究会・シンポジウムの主催、講演等を通じて、歴史GISの有効性、それをういたグローバル・ヒストリーの説得性を内外の研究者コミュニティに示した。

(1) 国際学会でのセッション主催・招待講演

- 世界経済史会議(WEHC:京都 2015)1.“Explaining Population Density in Early Modern India”, 2.“A GIS Approaches to Land Development and Social Change in India”
- アジア世界史学会(AAWH:シンガポール 2015)1. “A GIS Analysis of Village Land Registers in South India between 1870s and 1920s” 2. “A GIS-based Study on the Emergence of Small and Medium Scale Towns in Pre-Independent South India”

(2) 国際会議・セミナーの共催

- インド歴史研究カウンスル:(デリー 2016)“GIS-based Analysis of Demographic and Social Change in South India during the Colonial Period”in Inaugural Symposium celebrating the Collaboration of Indio-Japan Historical Studies (ICHR-JSPS Joint Symposium on Economic History)
- ベトナム国家大学、ハノイ国立歴史研究所(ハノイ 2015, 2016)“The Current Stage of GIS-based Historical Studies and Possible Collaboration among Asian Scholars”, “A New Interpretation of Indian Population Movement in Pre- and Early Census Periods”, “Agricultural Development and Social Transformation in Asia with Special Reference to Agricultural Finances”, “Shares for Society: Life and Production in Pre-colonial India”
- 復旦大学(上海 2014)“Constructing Pan-Asian Historical-GIS Infrastructure and Collaboration for Making

Global History from Asian Perspectives”

- 中山大学(広州 2014, 2015) “GIS-based Historical Studies and the Current Stage of its Development in Asia”, “New Interpretation of Demographic Movement in India from a GIS-related Study”

(3) 海外での講演

- ジャワハルラル・ネルー大学(デリー 2015, 2016) “Patterns of Urban Formation in Early Modern South India”, “Agricultural Development and Social Transformation in the Long Nineteenth Century” (Workshop: Reconsideration of the 19th century from Asian Perspectives),
- 国際社会史研究所(アムステルダム 2015) “From Shares to Land: Colonial Transformation of Rural India”, “Shares, Shares, and Shares: Life and Production in Pre-colonial India”, “Big Data, Big Question: Assessing Colonial Impacts upon India”
- 国立フィリピン大学(マニラ 2014) “GIS-based Global History from Asian Perspectives”
- ヨーロッパ大学(フランクフルト・オダー 2015) “Hinterlands and Commodities in Early Modern India”, “Global History and Euro-Asian Development Paths”

これらの海外での活動に加えて、水島は、国内において、次の活動を行った。

(1) 学会・国際会議の組織およびそでの講演

- 第113回史学会大会公開シンポジウム(東京大学 2015年11月)「歴史空間学の可能性」
- 東洋学・アジア研究連絡協議会(東京大学 2015年12月)「歴史地理情報システムとアジア研究」『シンポジウム 東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして』
- 本プログラムでの研究会・国際会議(2014年3月、10月、2015年5月、2016年4月)「アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究」、「GIS-based Global History from Asian Perspectives」, “A GIS-based Study on the Emergence of Small and Medium Scale Towns in Pre-Independent South India”
- Institute for Academic Initiatives (IAI), Osaka University and University of Oxford Center for Global History (2016年3月)(Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspectives). なお、必ずしも本プログラムの対象とはしていないものの、この講演を契機として、大量のデータをGISを導入して処理しようというプロジェクトがオランダで進むことになった。こうした研究者達が、今後この分野をグローバルにリードするのは間違いな
いであろう。

(2) 研究会報告

- 2014年3月 淡路夢舞台「アジア歴史空間情報システムによるグローバル・ヒストリーの新研究」
- 2014年12月 大阪大学中之島センター「ラールグディ全域土地台帳のデータベース化と分析の見通しについて」
- 2015年10月 新潟県民会館「ラールグディ全域土地台帳のデータベース化とその分析」

(3) 大学教育

- 東京大学学術俯瞰講義 2015年6月「アジアにおける空間情報インフラの状況と歴史研究の可能性」

(4) 高校教育研究会招待講演・NHK教育TV放送

- 宮城県高等学校社会科(地理歴史科・公民科)教育研究会歴史部会例会 2015年9月「グローバル・ヒストリーと南アジア」
- 北海道高等学校世界史研究会 2016年8月「アジアの開発とグローバル・エコノミーの展開: GISを用いて」
- NHK高校講座世界史 2015年～「世界史への招待 グローバル・ヒストリーの中の現代」・「グローバル・ヒストリーの中の人と暮らし」

以上のように、水島は内外の学界に本研究の成果を積極的に発信してきた。また、将来の歴史GISの普及を見込んで、4に示したように教育TVを含めた高校教育にも積極的に携わった。なお、ここでは明記していないが、2018年度から放送大学において「グローバル経済史」を開講し、研究の成果を広く大学生に普及する用意をしている。

続いて、「研究代分担者の研究内容とその成果」(進行中のものも含む)を簡単に紹介する

島田竜登は、16世紀以降の東南アジア社会のグローバルな連鎖とその影響の分析のため、GISを活用した二つの研究(近世植民都市バタヴィアの空間構造、ジャワ島海外貿易ネットワーク)を実施した。その結果、多民族共生のためのメカニズムとしての民族別居住区設定の実態と、多様なアジア人・ヨーロッパ人商人による棲み分け的な貿易網を明らかにし、16世紀以降、実質的に開始された世界の一体化を論じた。川島真は、日中戦争での兵

力とその展開について、日本側の戦史叢書や中国国民政府側の国防部史料などにあるデータを整理し、それを中国の上海交通大学・張志雲教授と協力してGIS処理した。また、20世紀前半の中国山西省の石炭産業の発展について、炭鉱の位置、産出量・額、その周辺の人口動向なども合わせてGIS処理し、1930年代から70年代まで長期に亘った戦争と商業、経済活動、生活などとの関連性を検証した。上田信は、中国の族譜『諸暨地名志』をもとに、族譜史料が豊富な浙江省諸暨市を対象にして、集落の分布・規模・主要住民構成・耕地面積をGIS処理した。また、東洋文庫収蔵の諸暨『鍾氏族譜』から族人のデータを整理し、鍾氏が住集落の人口動態(出生率・平均寿命・月別死亡率など)を分析した。これらを総合して、18世紀なかばの中国で見られた人口爆発のプロセスをマイクロ・レベルで解明した。柿崎一郎は、東南アジアの鉄道網発展過程に関して、タイ、ビルマ、仏印の鉄道年次報告書、統計年鑑をデジタル処理し、特に東南アジア大陸部の外港—後背地間鉄道の輸送状況と、それが商業流通に与えた影響をGIS化した。加藤博は、エジプトに関する種々の統計データと地理情報の接合によって、3つのテーマ(農村社会における開発と社会変容、人の移動からみた都市社会の変容、世界経済のなかのエジプト)を設定し、GIS基盤のエジプト社会経済史に新たな地平を切り拓いた。佐藤隆広は、インド年次工業統計を資料として、工場の空間的配置に関するGIS分析を進めた。宮田敏之は、GISを用いた二つの研究(アジア市場の産業構造と企業ネットワーク、アジア市場の発展とシャム外国貿易)で都市、産業、企業、貿易のデータをGIS処理し、より立体的にアジア市場の構造と企業ネットワークを解明し、戦前期の「アジア間貿易」の発展を明らかにした。脇村孝平は、GISを活用して19世紀後半～20世紀初頭のベンガルにおけるマラリアおよびコレラの流行に関する空間的分析を行ない、マラリアの流行に関する通説的な溢流灌漑システムの不全原因論に対して、労働移動原因説を示し、インドのBiplab Biswas(ボルドマン大学)との協働研究を進めることとなった。関野樹は、歴史GISに時間情報処理の手法を適用するため、時間情報システムHuTimeのWeb版の構築とデータ共有基盤への組み込みを進めるとともに、同ソフトウェアを効果的に活用するための時間基盤情報の整備を進めた。情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会(2016年)で報告されたその成果は、ベストポスター賞を受賞した。

以上のような研究代表者と分担者による研究成果とその発信に加えて、「日本の学術のグローバル化に関わるグローバル人材の育成について」も言及しておきたい。グローバル人材の育成という当該プログラムの目的に沿って、研究代表者が関与する国際学会やセミナーには、GISを手法として採用しようとする若手研究者を常時参加させてきた。具体的にいえば、本プログラムによって初めてGISを自己の研究に採用するようになった准教授クラスに加え、研究員・大学院生クラスの若手研究者が、本格的にGISを導入し、シニアの研究者や海外からの研究者と並んで英語による研究報告を行う経験を積んできた。アジアの研究者との協働研究への参加により、グローバルに活躍できる若手研究者が、このプログラムによって確実に育成されて来ている。本プログラムの実施過程で、研究代表者は、GISの手法導入を若手研究者に求め、内外の学会でのセッションやシンポジウムの実施、講習会、研究会の開催、講演などを通じてその意義を訴えてきた。その結果、東京大学からだけでなく、国内では立教大学、大阪大学、東京外国語大学、大阪市立大学、横浜市立大学その他、海外では中国、フィリピン、ベトナム、インドネシアの国々の研究機関から着実に歴史GISを駆使しようという若手の研究者が育ってきた。それらの若手研究者は、内外の研究者が集まる学会や国際会議において、早い時点から英語による口頭発表・論文発表の経験を積んできた。今後、そうした会議に参加し知己となった内外の研究者と協働して国際的な活躍をすることが期待される。彼らの今後の成長と、この分野での主導的な活躍を大いに期待している。

②研究成果が及ぼす波及効果

本研究では、「アジア全域のGIS研究基盤の整備」を掲げ、海外研究者と協力しながら、欧米に較べて圧倒的に劣位にあるアジアのGIS基盤を整備し、広く提供することも目的とした。それに関して、第一に、地名検索システムとしてGlobal Place Finder(<http://newspat.csis.u-tokyo.ac.jp/gpf/>)をインターネット上に提供し、また著作権のために一般公開はしないが、アジアの幾つかの国(エジプト、インド、インドネシア、台湾)のGISインフラを、関係研究者の間で利用可能とした。

第二に、これまでインドの地名(集落名)から位置を検索できるインド地名情報検索システムIndia Place Finder(<http://india.csis.u-tokyo.ac.jp/>)を整備してきたが、本研究では、それに加え、これまで空白となっていたインドの都市の詳細なベース・マップを多数整備し、都市内の詳細な空間情報を都市町名からも得られるようにした。第三に、地球地図(ISCGM:<http://www.iscgm.org/>)で公開しているアジアの国々のシェープファイル(GISソフトの汎用データ)を、種類ごと(鉄道駅、港湾、空港、都市、海岸線、フェリールート、自治体境界線、河川、道路)にまとめ、関係者にパッケージとして提供できる形にした。第四に、台湾の中央研究院との協働研究として、「時間基盤情報—

中国語繁体字(<http://www.hutime.org/>)と「ANGIS Data Portal(<http://140.109.161.58/>)」を作成し、一般に公開した。アジア全域のGIS研究基盤の整備には、国家による情報規制の問題もあり、まだ時間がかかるであろう。また、古地図データのGIS化に関しては、まだ緒に就いたばかりである。いずれも、今後の課題であるが、本研究が推進してきた空間情報基盤は、これらの課題に将来的にも貢献するものである。

「日本の学術のグローバル化にどのように寄与・貢献したか、その達成状況、実現可能性」について、本研究は、これまで記してきたように、GISを手法としてグローバル・ヒストリーをアジアの観点から見直すということを目的に、そのための情報基盤の整備、データベースの充実、研究結果の発信、若手研究者の育成、ANGISを核とした海外研究者が参加する国際的ネットワークの整備、複数のテーマでの国際協働研究を推進してきた。短期的な視点からも、長期的な視点からも、研究代表者が考える限りの企てを実行に移したつもりである。しかし、GISを歴史学に取り入れるという試みは、世界でも極めて例が少なく、アジア各国にはほとんどないと言って良い。まして、GISを組み込んでグローバル・ヒストリー研究を推進する試みは希有に近い。研究代表者は、日本はもちろん、フィリピン、ベトナム、中国、インド、オランダ、ドイツなどで講演を行い、この研究の意義を説き、少数の若手研究者の育成には目処をつけた。しかし、まだ絶対数は少なく、研究者の輩出と本格的な成果が数多く出てくるにはしばらく時間が必要であると認識している。

6. 今後の展開

①GIS研究基盤の整備と研究者の育成

これまでの研究活動により、歴史GIS研究基盤について、現時点に関しての空間情報の整備と利用に関し、空間上の点(ポイント)については比較的容易に研究に着手できるインフラが整えられた。これは、本研究の実施前には考えられなかったことである。しかし、歴史GISのいっそうの発展のためには、より多くの歴史地図を何らかの形で入手し、それを空間情報化し、提供していく必要がある。その作業は大変手間暇がかかるものであり、直接当該歴史地図を史料としない個々の研究者にそれを委ねることは不可能である。この研究を進展させ、世界での主導的地位を確立するには、古地図の提供→委託業者の育成→作成されたGIS地図のウェブでの集積→公共財化をシステムとして形成していく必要がある。本プログラムは、アジアと欧米との間にある蓄積情報の差を意識し、その差が近代のヨーロッパ偏重史観の背後にあるという問題意識から研究を進めてきたが、その意味では、アジアに特化して、より多くの歴史地図の処理を進めなければならない。歴史GIS地図のWikipedia版のようなウェブサイトWikimapを、高校世界史教員や高校生をはじめ、多くの協力者によって構築することは、喫緊の課題である。このような試みに若手研究者を参加させ、それを契機により多くの研究者が歴史GIS研究に参加することになり、その結果、アジアの視点でグローバル・ヒストリーを考える研究者の層が分厚くなっていくことを期待している。

②特定のテーマを軸とした先端的研究の推進

本研究では、アジア地域間の生産・流通・消費連鎖の研究とアジアの都市形成比較研究という二つの柱を立て、アジア各地の研究者を糾合した研究を開始した。後者は、アジアの研究者にとってそれほど違和感のないテーマであり、GISを応用することによって今後の研究の進展が大いに期待できる。他方、前者については、歴史統計資料の多寡やアクセス、紙媒体のデータのデジタル化、その空間情報化など、まだ多くの問題がある。しかし、それらの問題を解決しなければ、膨大なデータを蓄積し、さらにグローバル・ヒストリーの隆盛によってアジアにまで触手を伸ばしてきている欧米の研究に立ち向かうことは難しい。本腰を入れて対応しなければ、日本のアジア研究、アジアのアジア研究は、学術的な植民地化状況に至るであろう。アジアの研究者と提携して、可及的速やかにこの分野での主導権を取るべきである。

③H-GISを活用した世界史教育の普及

本研究では、先導的なグローバル人文学を掲げて、先端的研究の生成と発信、若手研究者のグローバル化に力を入れてきた。しかし、より長期的な視点から、より若い世代、言い換えれば高校生の世代からの育成が不可欠であると考え。パソコンや携帯電話等のIT全般の操作にほとんど抵抗のない若い世代に向けて、歴史GIS教育のための素材を作成・普及させ、高校世界史教員に教育に積極的に活用してもらうことが、底辺の拡大と世界

史認識の深化に重要な役割を果たすと考える。この面に関しては、研究代表者は高校世界史授業への歴史GIS教材の作成に着手し始めているが、そうした素材を蓄積するウェブの維持運営や、それらを教育課程に浸透させるためにはより大きな施策が不可欠である。GISは、与え手と受け手という形だけで動く手法ではなく、多くが参加できる学術的手法でもある。それへの参加を通して、グローバル化の時代に対応した意識や発想を身につけた、真にグローバルな活躍ができる次世代の人材の成長を期待する。

【研究成果の発表状況等】

○論文(計10件) うち査読付き論文 計6件、うち国際共著論文 計3件、うちオープンアクセス 計1件

- ① 水島司、「序章 アジア経済史とグローバル・ヒストリー」、水島司・加藤博・島田竜登・久保亨編『アジア経済史研究入門』、名古屋大学出版会、2015年10月30日、1-14頁、査読無
- ② Mizushima, Tsukasa, Did India experience Rapid Population Growth in the Pre-Census Period? A Village-level Study from South India, *International Journal of South Asian Studies*, Vol. 6, 2014, pp. 13-43, 査読有
- ③ 水島司、「農村社会構造の歴史的位相」、柳澤悠・水島司編『激動のインド4 農業と農村』、日本経済評論社、2014年9月、3-39頁、査読無
- ④ 高橋昭子、水島司、「人口の長期変動と開発」、水島司・川島博之編『激動のインド2 環境と開発』、日本経済評論社、2014年3月、3-56頁、査読無
- ⑤ 柿崎一郎、戦前期ビルマ鉄道の貨物輸送—外港～後背地間鉄道の輸送分析—、横浜市立大学論叢(人文科学学系列)、第67巻第2・3号(横浜市立大学学術研究会)、2016年3月、1-43頁、査読無
- ⑥ Kato, Hiroshi, Erina Iwasaki, Réseaux locaux en Egypte: Rôle des associations villageoises au Caire, *Mediterranean World*, Vol. 22, 2015, pp. 1-16, 査読有
- ⑦ Kato, Hiroshi, Reiji Kimura, Erina Iwasaki, Cultivation Features Using Meteorological and Satellite Data from 2001 to 2010 in Dakhla Oasis, Egypt, *Journal of Water Resource and Protection*, Vol. 7, , February 2015, pp. 209-218, 査読有
- ⑧ Kato, Hiroshi, Salwa Elbeih, Erina Iwasaki, Ahmed Sefelnasr, Adel Shalaby, Elsayed Zaghoul, The Relationship between Groundwater, Landuse, and Demography in Dakhla Oasis, Egypt, *Journal of Asian Network for GIS-based Studies (JANGIS)*, Vol. 2, December 2014., pp. 3-10, 査読有
- ⑨ Sato, Takahiro, India's Macroeconomic Performance in the Long Run, In Crispin Bates, Akio Tanabe and Minoru Mio (eds.), *Human and International Security in India*, Routledge, 21 September 2015, pp. 65-85, 査読有
- ⑩ Shimada, Ryuto, Import Trade in Precious Metals and the Economy of Japan, 1763-c.1850, In Money in Asia (1200-1900), Jane Kate Leonard and Ulrich Theobald (eds.), *Small Currencies in Social and Political Context*, Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, January 2015, pp. 443-463, 査読有

○著作物(計7件)

- ① 水島司・加藤博・島田竜登・久保亨編『アジア経済史研究入門』、名古屋大学出版会、390頁、2015年
- ② Mizushima, Tsukasa, George Bryan Souza, and Dennis O. Flynn (eds.), *Hinterlands and Commodities: Place, Space, Time and the Political Economic Development of Asia over the Long Eighteenth Century*, Leiden: Brill, 265 pp. , 2015
- ③ 水島司・柳澤悠編『現代インド2 溶融する都市・農村』、東京大学出版会、329頁、2015年
- ④ 水島司・川島博之編『激動のインド2 環境と開発』、日本経済評論社、300頁、2014年
- ⑤ 柿崎一郎、『第二次世界大戦中のタイにおける日本軍の軍事輸送に関する研究』(平成24～27年度科学研究費助成事業(基盤研究(C))研究成果報告書)、横浜市立大学、385頁、2016年
- ⑥ Kakizaki, Ichiro, *Trams, Buses and Rails: The History of Urban Transport in Bangkok, 1886-2010*, Chiang Mai: Silkworm Books, 436 pp, 2014.
- ⑦ Kato, Hiroshi and Erina Iwasaki, *Rashda: The Birth and Growth of an Egyptian Oasis Village*, Leiden: Brill, 294 pp,

○講演(学会発表を含む)(計17件) うち招待講演 計3件、うち国際学会 計16件

- ① Shimada, Ryuto, “American Shipping at Batavia from the Late Eighteenth Century to the Mid-Nineteenth Century.” The 7th International Congress of Maritime History, 30 June 2016
- ② Kato, Hiroshi, “Global Economic History from the Egyptian Perspective”, The 1st International Workshop on Asian Trade Networks Using Historical GIS, 21 May, 2016. 参加者数18名(国内15名、海外3名)
- ③ Miyata, Toshiyuki, “The Workshop on Asian Trade Networks Using Historical GIS.”, The 1st International Workshop on Asian Trade Networks Using Historical GIS, 23 May, 2016. 参加者数18名(国内15名、海外3名)
- ④ Wakimura, Kohei, “Epidemic Malaria, Semi-Arid Tropics and ‘Colonial Development’: The Cases of North and East India, 1871–1920”, TNAU-INDAS International Conference on Toward Sustainable Development of India and South Asia: Population, Resources, and Environment, 2 March 2016.
- ⑤ Mizushima, Tsukasa, “Keynote Speech: Who takes Leadership and What Role does ANGIS play in Emerging Global History?”, The 4th International Conference on Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS), 5 December 2015. 参加者数約70名
- ⑥ Sekino, Tatsuki, “Time Information System on the Web”, The 4th International Conference on Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS) 2015 (4th ANGIS Taipei Meeting 2015), 5 December 2015. 参加者数約70名
- ⑦ 水島司、「歴史空間学の可能性」、第113回史学会大会 公開シンポジウム「歴史空間学の可能性」、2015年11月14日。参加者数約100名(国内研究者)
- ⑧ Mizushima, Tsukasa, “Global History and Euro-Asian Development Paths”, Visiting Scholar Seminar at European University Viadrina, Frankfurt (Oder), 10 November 2015.
- ⑨ Shimada, Ryuto, “Batavia in a Global Context, 1619–1799: Spatial Analysis of Trading Network, Ethnicity and Land-use of Batavia”, The XVIIth World Economic History Congress (WEHC), 4 August 2015. 参加者数約30名
- ⑩ Miyata, Toshiyuki, “Land Use in Chaophraya Delta and Siamese Rice Export Development: The Case of Siamese Garden Rice”, The 3rd International Conference on GIS-based Global History from Asian Perspective, 4 June 2015. 参加者数72名(国内研究者53名、海外からの研究者19名)
- ⑪ Miyata, Toshiyuki, “Company, Industry and Network in “The Far East” in 1940: A Study of Directory Published in Hongkong”, The Panel on GIS for Historians: Case Studies in Asian Urban History at the Age of Globalization for the 3rd Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH), 30 May 2015. 参加者数20名
- ⑫ Shimada, Ryuto, “A Spatial Analysis of Ethnicity and Land-use of Batavia, 1619–1930”, The Panel on GIS for Historians: Case Studies in Asian Urban History at the Age of Globalization for The 3rd Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH), Nanyang Technological University, Singapore, 30 May 2015. 参加者数20名
- ⑬ Mizushima, Tsukasa, “Constructing Pan-Asian Historical-GIS Infrastructure and Collaboration for Making Global History from Asian Perspectives”, Visiting Scholar Seminar at Fudan University, China, 11 March 2015.
- ⑭ Kato, Hiroshi, Erina Iwazaki, “Spatial Transformation of Cairo Viewed from Urban-rural Migration”, The 3rd Meeting of the Project at JaCMES “Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies”, 13–14 February 2015.
- ⑮ Kato, Hiroshi, “Local Network in Egypt”, 2nd Meeting of the Project at JaCMES “Human Mobility and Multi-ethnic Coexistence in Middle Eastern Urban Societies”, 14 September 2014.
- ⑯ Sekino, Tatsuki, “Integral of Historical Data based on Spatiotemporal Information”, The 1st International Conference on GIS-based Global History from Asian Perspective, 30 March 2014. 参加者数23名(国内研究者20

名、海外からの研究者3名)

- ⑰ 上田信、「GISによる歴史人口学と地域社会史との結合ー浙江省諸暨盆地の事例研究ー」、第1回グローバル展開研究会、2014年3月31日。参加者数23名(国内研究者20名、海外からの研究者3名)

○その他(本事業で主催したシンポジウム等)(全11件) うち国際研究集会 計10件

- ① The 3rd International Conference on Asian Network for GIS-based Historical Studies (ANGIS) and CRMA 2014, Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre, Bangkok, Thailand, 5-6 January 2015. 参加者数約40名
- ② The 4th International Conference on Asian Network for GIS-based Historical Studies(ANGIS), Academia Sinica, Taipei, Taiwan, 4-6 December 2015. 参加者数約70名
- ③ The 5th ANGIS International Conference on State of the Art in Historical GIS in Asia, the University of Philippines, Diliman Campus, Quezon City, Philippines, 1-3 December 2016. 参加者約70名
- ④ The 1st International Workshop on Asian Trade Networks Using Historical GIS, Wohlfahrt-Toyama , Toyama, 21-23 May, 2016. 参加者数18名(国内15名、海外3名)
- ⑤ The 2nd International Workshop on “Asian Trade Networks Using Historical GIS, Hongo Campus, the University of Tokyo, Tokyo,1-2 October, 2016. 参加者数14名(国内12名、海外2名)
- ⑥ 第113回史学会大会 公開シンポジウム「歴史空間学の可能性」水島司 東京大学法文2号館一番大教室 2015年11月14日。参加者数約100名(国内)
- ⑦ Panel on GIS for Historians: Case Studies in Asian Urban History at the Age of Globalization at The 3rd Congress of the Asian Association of World Historians (AAWH), Nanyang Technological University, Singapore, 30 May 2015. 参加者数約20名
- ⑧ Session on GIS Approaches to Land Development and Social Change in Asia and Africa at XVIIth World Economic History Congress (WEHC) 2015, Kyoto International Conference Center, 4 August 2015. 参加者数約30名
- ⑨ The 1st International Conference on GIS-based Global History from Asian Perspective, Hongo campus, the University of Tokyo, Tokyo, 29-31 March 2014. 参加者数23名(国内20名、海外3名)
- ⑩ The 2nd International Conference on GIS-based Global History from Asian Perspective, Hongo Campus, the University of Tokyo, Tokyo, 4-5 October 2014. 参加者数30名(国内22名、海外8名)。
- ⑪ The 3rd International Conference on GIS-based Global History from Asian Perspective, Hongo Campus, the University of Tokyo, 4-7 June 2015. 参加者数72名(国内53名、海外19名)

○ホームページ

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/ahgis/index_j.html